

## ドルトによる子どもの新しい教育(Ⅱ)

山中 哲夫 (愛知教育大学外国語教育講座)

(2005年10月12日受理)

### *La nouvelle éducation de l'enfant selon Dolto (Ⅱ)*

Tetsuo YAMANAKA (Department of Foreign Language, Aichi University of Education)

**要約** 言葉を介在させない愛撫は、子どもにとって危険な行為。／離乳期は子どもに母親の身体をあきらめさせる時期。／横たわった父親はその存在を子どもに失わせる。／赤ん坊のそばでの両親の性行為は有害。／託児所に預ける際には迎えに来たときの母親の態度が重要。／食事のマナーを躾けるときの留意点。

**Keywords** : リビドー, 母子分離, 男性性, 肛門期

#### 子どもの性

子どもを甘やかすこと、子どもをペットのように可愛がること—これは子どもにとっても大人にとっても大変な快感となる。確かにそれだけ見れば、これは愛情の一部ではあるだろう。しかし、子どもは人間であるので、とりわけ幼いときに、彼あるいは彼女を子猫やあんなかのように扱ってはいけない。ドルトによれば幼い子どもも成長途上にある男性であり女性であって、それなりの官能性を有しているという。言語が介在する必要性がここにある。言葉も歌もなく、体と体が触れ合うこと、とりわけ黙ったままで官能的快感をもたらすものは、きわめて危険である。これは無意識裡に行われる、親による子どもへの性的誘惑にほかならない。子どもの想像的生活において危険な陥穽となる。言語を介在させず、無言のまま身体的接触の快感を幼い子どもに与えつづけることは、じつは一種の性的虐待となっているのである。

3, 4歳でも子どもの官能性は非常に強いとドルトは言っている。したがってペットのように子どもを扱うことは、将来の健全な性器的官能性への発達を阻害することになる。つまり極言すれば、犯罪者になる、ならないは別にして、将来その子どもは性的異常者になる可能性がある。たとえばベッドでの雑居状態はどうだろうか。パジャマ姿のまま親子で食事をしていても、会話がなければ問題はない。ドルトのところに連れてこられたある男の子の症例では、その子は両親に過剰に甘えていて、母親の腕の中にうずくまったまま、何の会話もなく、まるで巣の中にいるようにしてベッドに入っていた。彼はそこが自分本来の場所ではないことを承知していた。異性の親と癒着し、同性の親に対して激しい嫉妬を示していた。その結果、家庭ではベッドやその周囲をめっちゃくちゃにし、いつも大騒ぎした。これは彼の居心地の悪さの表現であった。

つまり、それと気づかずに親は子どもの性的官能性を極度に刺激して、彼をヒステリー状態に追いやっていたわけである。これは残酷なことである。

母子合体の快感—生後間もない赤ん坊にとってこれは必要不可欠なものである。授乳期は言うまでもなくその人の人生を決定するほどの重要な時期である。この時期に母子のスキンシップがなされていたか否かが、その後の人生を決定的に左右する。メラニー・クラインはこの授乳期を「想像上は食人的」と見做し、そこにすでに母子間の憎悪の存在を指摘したが<sup>(1)</sup>、それでもこの時期は乳児にとって、一種のエデンの園の時代であることには変わりない。この授乳期に劣らず重要なのが離乳期である。出産・分娩という「トロマチスム」を蒙った子どもは、ここで再び離乳という第二の「トロマチスム」を蒙る。離乳期は授乳期の母子合体というエデンの園の快感をあきらめる重要な時期である。試練の時期といってもよい。母親の立場から言えば、子どもにたいして、母子合体の快感をやめさせる時期である。子どもの身体が母親から完全に分離して、子どもは子どもの身体を、母親は母親の身体を持つ時期にあたる。一言で言えば、母親の身体は誰のものか、を子どもに思い知らせる時期なのである。

#### 離乳期の子どもに思い知らせるべきこと

離乳期の子どもにはっきりと伝えるべきことは次のようなことである。《母親には自分よりも大切な人がいて、その人は夜には母親と一緒に寝て、自分が持っていない、またこれからも決して持つことのない、母親のからだに対するさまざまな権利を持っており、母親もこの人のからだに対してそういった権利を持っているということ》である<sup>(2)</sup>。なぜはっきりと伝えるべきかというと、幼い子どもはこういった権利を実際に持っていると思いがちであるが、あるいは持ちたいと

欲望するからである。いつかは母親(父親)と結婚することがあると想像するからである。御伽噺や童話は子どものそういった無意識の願望を叶えてくれる物語である。古今東西、あれほど長い間子どもたちから(大人も含めて)支持され、語り継がれ読み継がれてきた理由がそこにある。

ともかく、母親の身体をあきらめさせること、離乳期が完全に意味をもつのはこれが明確になされたときである。身体の断念がなされないとき、離乳期は失敗に終わる。離乳期は第二の分離期と呼ばれる所以がここにある。しかしながら、この分離はうまくいかないことが多い。母親が子どもの身体をあきらめ切れないからである。その理由は、母親が自己の官能性のための「有能なるユリウス帝」Jules à la hauteur (ドルト)を持っていないことがよくあるからである。その場合子どもにとって母親は、きわめて危険な誘惑となる。幼くして父親を失ったサン＝テグジュペリと母親の関係がこれである。大蛇に嚙み込まれた象(『星の王子さま』)は、母親に去勢されたサン＝テグジュペリ自身を表わしている。一方また、夫婦関係に満足していない父親と幼い娘の関係についても、同じことが言える。

すでに述べたように、子どもとの無言の身体的接触は、優しさの影に性的暴力が隠されている。もちろんこの暴力は、無意識的なものであり、殴ったり叩いたりするようなアクティヴなものとはまったく異なる。しかしこの「優しさ」は子どもの健全な心的発達にブレーキをかけ、やがて子どもは無口になり、運動嫌いになり、閉じこもってしまうようになる。さらに重篤な場合には、言語・精神運動性・情動性の面で重大な遅滞を招く。例えば、ドルトの症例では<sup>(3)</sup>、父親不在の中で、子どもが父親の代替物として母親のベッドに入ってくる。そうすると三週間で子どもの官能に火がつく。その結果が退行、学業低下である。女の子の場合、さらに退行して、乳児期に戻り(いわゆる「赤ちゃん返り」)、おねしょをしたり、幼児のような発音を繰り返したりするようになる。

## 横たわった父親

ドルトに言わせれば、父親とは子どもにとって男性性の表象に他ならず、常に立っている存在として認識される。したがって横たわった父親の姿は、幼い子どもの目には世界が転倒したように映る。《太陽は空にない状態は変態である。横たわった父親はいわば地に落ちた太陽である。ドルトは浜辺で面白い情景を観察してそれを報告している<sup>(4)</sup>。砂浜で父親が横たわっている。近くに2,3歳ぐらいの幼児がいるが、父親の存在に気づかない。ヨチヨチ歩きしながら、知らない

で通り過ぎようとして、すぐそばまで来てはじめて父親の存在に気づく。母親も同じように砂浜に寝そべっていたが、幼児はすぐに気づいて、喜色満面の笑みを浮かべて母親のほうに歩いてゆくのである。これは象徴的な情景である。大地は母親を象徴化したものである。したがって母親が寝そべっていても、子どもはすぐにその存在に気づく。しかし父親は空に照る太陽であり、大地に屹立する樹木である。立ち上がっていないければその存在は認められない(砂丘に寝そべって涙ぐむ王子さまは、大人の男性になれない作者の母親コンプレックスを表わしている)。

## 両親のセックスと子どもの関係

睡眠下の学習能力について有名な実験がかつて行われた。眠っている被験者にレコード録音の外国語を聞かせて、その無意識の学習能力を調べたのである。結果は、目覚めているとき以上の能力を発揮することが分かった。つまり人は目覚めているときよりも、眠っているときのほうが、周囲からの影響を受けやすいのである。そこで問題になるのが、赤ん坊がそばで眠っているときの、両親のセックスである。

ドルトの考えでは、赤ん坊は眠っているときも、無意識のうちに両親とコミュニケーションを行っている。両親がそばで性行為を行っているとき、二人の性的欲動の高まりが赤ん坊にも影響して、両親と性的に一体化したいと望むようになる。ドルトは胎児段階ですでにリビドーが存在すると主張する<sup>(5)</sup>。これは大いにあり得ることである。胎児は母体の循環器による体液的な反応に依存している以上、母親の性的な反応にまったく無関係ではあり得ない。多くの民族において、女性が妊娠すると性的関係が絶たれ、授乳期が終わるまでこの禁欲が保たれるという習慣があるが、これは、両親の性交が赤ん坊にあたえる悪しき影響が経験的に知られていたからであろう。野生動物においても同様の行動が見られる。

両親が愛の営みを行っている最中、そばで眠っている赤ん坊は、同じ欲動に飢えている。その最中に赤ん坊が夜泣きする、おっぱいをほしがる、普段しない排尿や排便をする、これらは、自分のことを忘れないでほしいという、赤ん坊の側から発せられた信号に他ならない。これとは逆に、まったく反応がない場合、赤ん坊は完全に胎児期に退行して、両親と全面的に合体していることになる。したがって、子どもは無意識裡にすべてを知っていると考えるべきである。直感的にすべてを感じ取っていると見做すべきである。それゆえ、両親のセックスについては、子どもの疑問に言葉で明確に答えてやる必要がある。ごまかしても、子どもは無意識ではすべてを直感的に理解しているのだから。

子どもに有害なファンタズム(幻想)を抱かせないために、一番よいのは寝室に子どもを入れないことだとドルトは助言している。子どもが間にいてはじめて自由になれる夫婦は、やがて遅かれ早かれ離婚の危機に遭遇する。夫を拒む妻の言い分は―“そばに子どもがいるから…”であることが多いが、これは口実に過ぎない。実際は夫を男性と見做さず、父親と見做しているわけである。父親という名の下で、夫が妻から男性らしさを奪われ、妻が女性らしさの喪失を母性によって正当化している場合が、これである。

夫婦の寝室の外に寝かされつづければ、子どもはやがておとなしく眠るようになる。母親の用心する心は、母親が眠っているときも目覚めている。子どもが母親を必要としたとき、たとえ別の部屋にいても、母親はすぐにそれと感じ取るものである。そのことで夫を起すことになっても、子どもがそばに寝ているよりはまだよいことである。子どもをよりよく育てる方法、それは生後3ヶ月過ぎれば別の部屋に寝かせることである。そのことで、子どもから夫婦生活を邪魔されることはきわめて稀になり、子どもも両親から必要以上に激しい性的リビドーを蒙らなくてすむようになる。

### 託児所に預ける

母親の中には、一日中子どもを託児所に預け放しにしている自分を、悪い母親だと思っている人がいるが、これは間違いである。悪い母親などいない。本当に悪ければ、子どもは育っていない。発育不全で死んでしまっているだろう。

託児所の長所は他の赤ん坊と数多く接触することができるということである。これは家庭だけでは学べない多くのことを、赤ん坊に学ばせるよい機会である。

託児所に預けるときにもっとも大切なことは、迎えに来たときの母親の態度である。再会が大事なのである。迎えに来たら、スキンシップをし、言葉をかけてやる。言葉をかけてやりながら、優しく静かに服を着せてやる。言葉をかけることは赤ん坊にとって愛撫にも等しいものだ、とドルトは力説している<sup>(6)</sup>。そういった中で、例えば家で待っている父親や兄姉のことなどを話して聞かせる。帰宅すると、家族中が歓迎し、抱いて可愛がってあげる。このようにして育った赤ん坊は、4,5ヶ月もたてば、自ら母親の足音に耳をそば立て、待ち構え、腕を差し出して甘えてくる。

母子関係にはキスや愛撫のほかに、言葉が重要であるとドルトは言っている。彼女の言葉の力に対するポジティブな価値評価は、一見すると過大のように思われ勝ちだが、しかしこれには数多くの症例による裏づけがある。母親による言葉の「湯浴み」は、赤ん坊にその言語を準備させる。つまり、きわめて早い時期から顔の表情がはっきりしてくるのである。言語を介し

て他の顔と交流しているわけである。ここでは母親が投げかけてくれる言葉をよりどころにして、母親と心的交流を行っているわけである。これによって、赤ん坊の表情がはっきりしてくる。すなわち赤ん坊は自分の言語を準備し始めているということである。私見によれば、現代の若者の表情が無表情あるいは表情に乏しいのは、赤ん坊時代に母親から言葉によるこの「湯浴み」を十分に与えられなかったからではないだろうか。もちろんそれだけがすべての原因ではないが。

子どもを叱ったり叩いたりした後、後悔して相手を慰めるように子どもの機嫌を取る母親がいる。罪責感による代償行為だが、この行為は反ってその一貫性のなさによって、子どもに悪い影響を与える。母親は子どもへの愛を引っ込めたり与えたりしているわけで、子どもはわけが分からなくなり、コミュニケーションのコードが混乱してしまう。そういうときどうしたらよいのか、ドルトは次のように子どもに言いなさいとアドヴァイスをしている―《あなたを愛してるのよ。怒るのは愛しているからなのよ。あなたを叱るのは、私には不快な、あなたにとって危険なことを、あなたがやったからなのよ。》<sup>(7)</sup>このように叱る理由をはっきり言葉で言ってやること、言葉で言うことが大事だと彼女は指摘している。なぜなら、言葉で言わないと子どもには理解できないからである。(父親も含めて)親が言葉で言えない場合、それは叱っているのではなく、ヒステリーの怒りを爆発させているだけである。このヒステリー性の怒りの真の原因は、子どもとはまた別のところにあるのだが、そのことはひとまず措く。

### 食事のマナー

口唇期は泣き叫ぶ時期で、自己表現の困難な時期である。この時期の子どもは赤ん坊あるいは乳児と呼ばれる。これに対して肛門期は、運動能力や神経筋が発達する時期で、この時期の子どもは幼児と呼ばれる。大体2歳前後である。食事のマナーが始まるのがこの時期からである。“なかなか子どもに食べさせることができないんです、ぐずぐずして、いつまでも終わらないんです。”一般に母親はよくそう言ってこぼすものである。ドルトが紹介したある家庭の例では<sup>(8)</sup>、食事は母子だけで取っていて、子どもは6歳と4歳の男の子二人である。その家庭では母親は食事のときいつでも、“早く食べなさい、さあ早く、冷めてしまうじゃないの、ほら、ほら、まだお皿に残っているでしょ”と子どもを急かせていた。そして食事の世話はすべて母親がやっていた。子どものために皿を並べてやる、肉を切ってやる、飲み物をついでやる、等々…。その結果、子どもの自律神経を損ない、子どもの意欲を失わせていた。これらの世話は22ヶ月までに終わるべき世話である。

22ヶ月ないし24ヶ月から子どもは肛門期と呼ばれる時期に入る。すでに述べたように、この時期から目立って運動能力や知能が発達してゆくので、3歳からはさまざまなことを自分でさせるべきである。3歳児にさせること、それは食事に関することがまず一番である。一人で食器を並べたり、皿を取り替えたり、皿の中のものを取って食べたり、飲み物を注いだり…。こういったことは、不器用だが、実際に失敗を繰り返しながら、親から手伝ってもらいながら、子どもは学んでゆく。母親が何もかもやってしまっただけでは、子どもにはせっかくの学ぶ機会が与えられないままになる。

食事で大事なことは、快適な雰囲気、楽しい会話、である。そういった環境で大人の中で食べる練習をした子どもは、急速に食事のマナーを身につけてゆく。そこでの子どもに対する具体的な対応について、ドルトはこのように語っている<sup>(9)</sup>。皆が食べ終わっても子どもが終わっていないとき、親は無理に子どもの食事を終わらせようとしてはいけない。食卓で両親と一緒に食べられることは、子どもにとって一段昇格したことで、ある年齢に達するまではできないことである。それで大人の食事前に子どもに先に少し食べさせておいたり、子どもの食事後、チョコレートなどを与えて、大人の食卓に加わらせたりするとよい。それでもおとなしくせず、皆の食事の邪魔をするようだと、食卓から遠ざける。大事なことは次の二点 — 食卓の雰囲気を壊してはいけないということ、食事に緊張を強いてはいけないということ。

ある種の子どもは、汚さずに食べることをきわめて早く身につけるが、しかしある日突然、駄々っ子のように振舞うようになる。無理して行儀よく食べていた、その無理が限界に達したわけである。規則正しく、しかも汚さずに食事ができるには、ある年齢に達する必要がある。その年齢に達するまで、気長に根気よく躰けなければならない。大事なことは、子どもが望めば、たとえ子どもが食事を終えていても、大人と同席させることである。皆と一緒に食卓に着くことに意味がある。そうやって子どもは大人や上の子どもを手本として学んでゆく。食事中に叱ると、子どもの食欲を失わせる。やがて不安がって食卓につかなくなる。

食事の時間はくつろぐ陽気なひとときであるので、子どもを躰けようとして、大人はそういった環境を壊してはいけない。両親は子どもの食べ方や食べる量などを監視すべきではない。子どもが独力で楽しく食べていれば、食べた量など問題ではない。食欲があるから子どもは食べるので、食欲があることのほうが大事なのである。しかしまた、おなかが空かないことは「悪いこと」でもない。善悪の問題ではない。

6,7歳以前では長時間の食事に慣れない。子どもが望めば、食欲に応じて彼の皿を食卓に置く。子どもが自分で取って食べる場合、食べられる量だけ用意し

て食べ残しがないようにする。食べ物を無駄にしないことが肝要である。それでもどうしても食べ残しが出る場合がある。その場合は、母親が食べ物の残りを捨てるのを、子どもに見せないようにしなければならない。“まだヨーグルトが残ってる？じゃ、ふたをして冷蔵庫に入れておきましょう”という具合に。

衣服の脱ぎ着や部屋の後片づけと同じく、子どもは意外に早く食事についても一人前になってゆくものである。しかし母親はそのことに気づかない。なぜなら、あまりにも長い間、子どものために何もかも世話をしてきた習慣が身についてしまっているからである。実際にはもうできるようになっているにもかかわらず、そのことに気づかないか、あるいは気づきたくないか、どちらかである。

食事の習慣は日常生活の中の単なる躰の問題と軽く考えるのは間違いである。一人で食事ができるように習慣づけることは、取りも直さず、子どもが独力で困難を切り抜けられるように躰けていることに他ならない。神経質にならずに(これがもっとも大切なことである)、快活に(これも大事だ)日常生活を送れるように導いていることに他ならない。

これができるようになれば、これからの人生に対しても、立派に対処できるようになるだろう。人生のさまざまな困難に対して、退行せずに乗り越えてゆくことができるようになるだろう。

したがって、繰り返しになるが、食事のとき、大人は子どもに強制してはいけないし、何もかも自分でやってしまってもいけない。そして、決して怒らないことである。

## 注

- (1) 離乳期の問題については『クライン著作集』(誠信書房)第3巻、第4章に詳しい。
- (2) Françoise Dolto, *Les étapes majeures de l'enfance*, Gallimard, 1994, p.15.
- (3) Ibid., pp.15-16.
- (4) Ibid., p.17.
- (5) Ibid., p.20.
- (6) Ibid., p.23.
- (7) Ibid.
- (8) Ibid., pp.23-24.
- (9) Ibid., p.24.

## 付記

最近ようやくドルトの理論と実践を分かりやすく紹介した解説書が出た。この種の本が今までなかったことが不思議である。丹念に書かれた好著である。広く読まれることを期待する。

竹内健児『ドルトの精神分析入門』誠信書房、2004。